

## 「転倒を繰り返す利用者の根本原因追求への取り組み」

○発表者名 社福) こうほうえん いなば幸朋苑 田中博志  
共同研究者名 社福) こうほうえん いなば幸朋苑 治部田晃典 村田律子

### 1. 問題提起

当苑では、毎月のヒヤリハット報告をリスク委員会で集計し、RCA手法を用いて事故防止、再発防止に取り組んでいる。過去一年間におきたヒヤリハットの中で、再発防止策を実施しているにも関わらず、同じ利用者が転倒を繰り返していることが分かった。これは原因追求が不十分なため、再発防止策が適正でないことが問題ではないかと考えられた。老健の利用者はADLの向上等で在宅復帰の可能性も高く、転倒からの骨折は復帰へのゴールを遠のかせてしまう。そのため、転倒者の減少と効果のある再発防止策の立案は職員の課題の1つであった。今回、転倒を繰り返す利用者の事例をRCA分析し、再発防止策を実施した結果、効果が得られたので報告する。

### 2. 目的

本研究では、RCA分析で根本原因を抽出し、立案した再発防止策が適性であったのか、効果を明らかにすることを目的とした。

### 3. 方法

転倒を繰り返す3名の利用者を対象に以下の内容に取り組んだ。

①3名の過去の事例をなぜなぜ分析し、問題点の抽出から再発防止策を立案

H28.5.1～H28.5.31

②再発防止策の実施

H28.6.1～H28.11.30

③対策・取り組み記録用紙を作成、毎月のチーム会で対策の妥当性と有効性を検証

### 4. 成果・課題

成果

A氏 70歳代 女性 (H27年度 転倒5件)

要介護3 障害高齢者日常生活自立度 A1 認知症高齢者日常生活自立度 IV  
HDS-R 3点 右眼義眼

A氏は殆どの事例で食事中に立ち上がり、つまずいて転倒していた。

A氏のなぜなぜ分析では、根本原因が3点上がり、各々に再発防止策を立案。

① 原因：食事前にトイレ案内したが、排尿がなかった

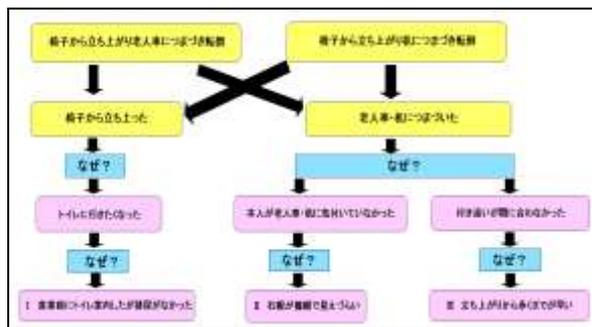
防止策：トイレ案内時間を変更、トイレで排尿してもらう

② 原因：右眼が義眼で見えづらい

防止策：歩行時右側について見守り介助する

③ 原因：立ち上がりから歩くまでが早い

防止策：ダイルームの席を周りにつまずきやすい物がない席に変更する  
生活リハビリとして歩行訓練又は階段昇り降りを1日1回行う



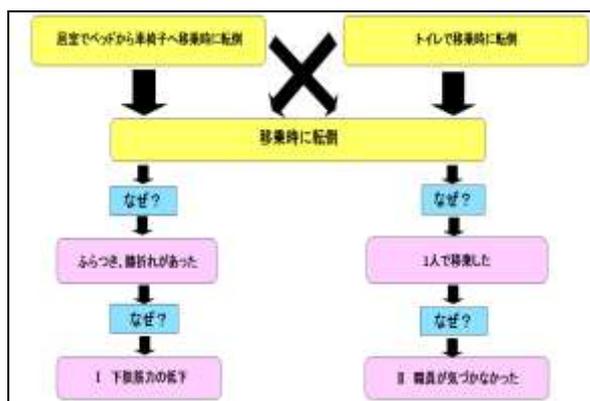
B 氏 90 歳代 女性 (H27 年度 転倒 5 件)

要介護 4 障害高齢者日常生活自立度 B1 認知症高齢者日常生活自立度 II a  
HDS-R 13 点

B 氏の転倒事例は車椅子からの移乗に関連したものが多い

B 氏のなぜなぜ分析では根本原因が 2 点抽出された

- ① 原因：下肢筋力の低下  
防止策：立位訓練と座位で膝の屈伸運動を 1 日 1 回行う
- ② 原因：利用者の動きに職員が気づかなかった  
防止策：ソファ案内時、横になりたい場合はソファベッドにしパーテーションを立てて休んでもらう  
生活リハビリとして認知面の維持向上のため国語、漢字ドリルを 1 日 10 分以上行う



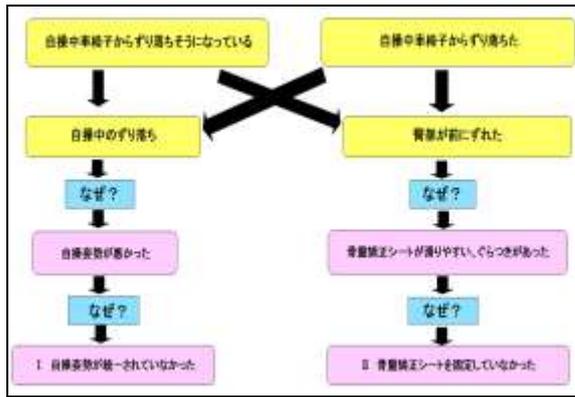
C 氏 90 歳代 男性 (平成 27 年度 転倒 4 件)

要介護 3 障害高齢者日常生活自立度 B2 認知症高齢者日常生活自立度 IV  
HDS-R 3 点

C 氏は車椅子自操中のずり落ちが多い利用者である

C 氏はなぜなぜ分析で 2 点の根本原因が抽出された

- ① 原因：車椅子の自操姿勢が統一されていなかった  
防止策：自操時はアームレストに肘を置き両下肢で自操を促す
- ② 原因：骨盤矯正シートを固定していなかった  
防止策：骨盤矯正シートを撤去し、座布団を固定して高さを調整する  
生活リハビリとして棒体操で肘の屈伸運動を行う



以上の再発防止策を実施した結果、3名とも期間中の転倒は0件であった。

A氏はトイレ案内時間、腹部マッサージ、座位姿勢の統一をしたことでトイレでの排尿が増えてきた。この結果、以前のようにトイレに行くと言って急に立ち上がったたりする行動が減少している。右眼の義眼歴が長いので右側を注視することが多く、右側へのふらつき等がよく見られたが、右からの付き添い、見守りをするすることで、障害物への対応が素早く出来るようになった。席の変更等の環境面の対策をとったことで、職員が側にいくまでにつまずく要因を減らすことができた。

B氏は1人で立位をとれないことが多かったが、立位訓練、膝の運動を取り入れたことで、現在は1人で立位がとれるようになってきている。以前は部屋にこもりがちだったが、取り組み中からダイルームで他利用者や職員と趣味の裁縫などをして過ごす時間が増えた。このことで多くの職員の目がゆき届くようになったと考えられる。

C氏は車椅子自操時にアームレストに肘を置く姿勢を統一したことで、自操時のずり込みがなくなり、安定した姿勢で自操できている。併せて生活リハビリを続けた結果、3名ともADLは向上している。今回のRCA手法を使って根本原因を追及、再発防止策に取り組んだ結果は妥当であったといえる。

### 課題

取り組みは転倒ゼロという効果は得られたが、対策を実施していく中でいろいろな意見が交わされ、十分に分析できていたかという振り返りがなされた。今後の課題として、定期的にRCA分析による事例検討を行うことで、職員のアセスメント技術を向上させることが大切であると考えている。検討していく中で多くの意見を聞くことで、職員一人一人の気づきの幅が広がり対策の立案にも役立つと思うからである。更にはレベル0報告が少ないことも課題としてあげられた。日々のケアが終わったあとに「あれは邪魔だったな」とか「これをすれば良かったな」という振り返りの中に多くのレベル0が隠されているのに、報告としてあがってこない現実がある。転倒防止、事故防止の観点から全員が重要性を理解し、レベル0報告がしやすいシステム作りを検討したい。

### 【参考文献】

- 1) 石川雅彦：RCA 根本原因分析法実践マニュアル，医学書院，2012
- 2) 飯田修平，柳生達生：RCAの基礎知識と活用事例，日本規格協会